

# 第13回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

## 熱中しよう



杉妻小3年 大井陽真

ぼくは、熱中しようの新聞の記事を読みました。さききんは、晴れてもくもりでも雨の日も外はむしあついです。学校に行ったり帰ってきたりするだけでもあつくてあせをかきます。その時は、水やお茶をのんだり、エアコンをつけて体の体温を下げてたりして、自分でたいさくをしています。

この記事を読むと、熱中しようできゅう急車で運ばれる人やなくなる人がたくさんいたんだなと分かりました。

おじいちゃんやおばあちゃんがかかりやすいくいっしと声をかけ、ちよくせつわね。」

ぼくのお母さんは、おじいちゃん、おばあちゃんの家におべんとうをはいたつています。

お母さんは、ちよくせつわした時は、「あついから水分とってね。」と声をかけ、ちよくせつわを大切にしているやさしいお母さんです。

## 気温40度超から考えたこと



本宮まゆみ小5年 後藤優実

「各地で40度超」という言葉が目にとまり私は、この記事を読みはじめた。今年の夏も異常気象で雨、かみなり、暑さが続いていたので気になったのだ。

記事には、日本だけでなく世界各地で、異常な熱波が発生しているとのこと。そのせいでえさや水が少なくなり、「やせ」かけて、海岸に打ちあげられたアシカの「子」の写真のついでに、私が想像するアシカは、プクプクまるまるしている、かわいいうしなだ。でも、写真のアシカは、ほねが見えている。げつそりして、やせかけたアシカだ。この地球温暖化によるえいきよ

よにすんでいる家やぐがいたせなかつた時は後からでん話をし、あん金をかくなしているそうです。お母さんは、おじいちゃんやおばあちゃん熱中しようにならないようにがんばっているんだなと思えました。

一人ですんでいても、はいたつする人やとなりの家の人が、気にかけてくれる人がいるとおじいちゃんやおばあちゃんも安心すると思います。みんなだすけあって、みんなのいのちを大切にしようと思えます。

## 小学3・4年生の部 優秀賞

### 校則を「自分で」考えること



城西小4年 平出藍祐子

私は、読売KODOMO新聞6月9日号の記事「みんなが校則決める」の記事に興味を持ちました。この記事では、当り前のよう決められた「校則」を六年生自ら考えるという取り組みが書いてあり、皆でルールの意味を考え、その結果、校則をいくつか変える「改革」をすることができた、とありました。

私も今回、改めて自分の学校の決まりを確かめたところ『友達を呼ぶときは名前を呼ぶ』という決まりが、正しく呼びます』という決まりがありました。このことについて私のクラスでは、担任の先生といっしょ

に考えて「相手がいやな気持ちにならず、親しみをこめて呼び合えるあだ名であればよい」という決まりをみんなが考えました。私はその決まりで、友達とより一層仲が良くなったか、気軽に声をかけやすくなったかを感じています。

会津藩の学校では、会津藩校日新館にある「什の掟」を参考に作られた「あいづ宣言」があり、小学一年生からこの教えを学びます。「やつてはならぬ、やらねばならぬ、ならぬことは、ならぬものです」校則がなくても責任のある行動をするため、皆がこの言葉を大切にしていこうと提案します。

## 海洋プラスチックゴミ問題



大島小5年 柏原希音

いわきの海岸に捨てられていたプラスチックゴミを集めて作った「怪じゅうアート」の写真が目にとまりました。ひと目見たときは正直「こわい」という印象でした。

新聞の記事を読んで、砂浜に打ち上げられたクジラの胃の中から、百キロものプラスチックなどのゴミのプラスチックが捨てられていたこと、ゴミを資源とするリサイクルは、私にもできることだ。できることをしながら取り組みを広げていきたい。今、ひとり、ひとりができることを続けていくことが温暖化防止につながる。これから先の人間にも生き物にも優しい地球のために。

日本では、かん境問題が大きくなり上げられるようになってから、マイバッグを持つようになったり、お菓子のパッケージが紙に変わったり、ストローまでがプラスチック問題が理解することだと思えます。その手段の一つとして「怪じゅうアート」は、子どもから大人まで目にとまり、かん境問題に多くの人が興味を持つきっかけになると思います。

私もマイバッグ、マイ水筒を持つなどして、ごみさくげんを心がけています。そして、「怪じゅうアート」を多くの人にしてみたい福島のきれいな海を取りもしたいと思います。

## ごみの少ない福島県をめざして



大島小4年 桜井那菜

私の家では家族で新聞を読む時間があります。ある日父にすすめられた記事に「本県ごみ排出量全国ワースト2位」とありました。読んでいくと、福島県は県民一人当たりのごみ排出量が多めで、長年の課題となっていたそうです。その原因は、全体の七割をしめていた生活系のごみや、分別されずに捨てられる資源ごみが多かったです。私はよく、母の手伝いでごみを捨てに行きます。そこで「分別されていないので捨てられません」という紙がはらわれているのを見かけることがありました。新聞に書いてあったことは、

のことなのだと分かりました。そのことをきっかけに家族とごみ問題について話をしてみました。父は、有料の指定ごみ袋を使う市町村があると言っていました。この事は記事にも書いてあったので、インターネットで調べてみました。ごみ袋が有料になると、ごみの全体量がへり、それと同時にリサイクルする人がふえ、資源ごみがともふえることが分かりました。

記事では、このままごみが増えなければ袋の有料化をやむをえないと書いてありました。福島県でも袋を有料化している所があるそうです。私の住む郡山

市はこのような取り組みはされていません。私は、有料化しないごみがへらなれないのはごみ袋だと思えます。ですが、地球のかんきようのことを考えるとそれは仕方ないのかと思えました。

私は今まで福島県のごみ問題を知らませんでした。それに日々の生活でごみへらすことなど考えることもありませんでした。県全体の協力が必要なんです。なななは、私の家全体のごみからへらすよりよくしていくたいと思えます。

## 小学5・6年生の部 優秀賞

### 祭りの記事から考える



福大付属小6年 長谷川慶佑

福島市の祭りの記事に心をひかれた。三年ぶりに通常の開催方法で行われるという。新型コロナウイルスの影響で、祭りだけでなく地域の行事が中止となり、実施方法の変更を余儀なくされたりしている。誰のせいでもないときあきらめの気持ちを抱くしかなかったことが何度もあった。嬉しさが込み上げた。

コロナ禍前は、父や母に手を引かれ、毎年のように祭りを進められたものだ。息を合わせて汗をかきながら踊る踊り手や、それを笑顔で見守る人々、屋台の美味しそうな香り。記事を読みしそうな顔。記事を読みしそうな顔。記事を読みしそうな顔。記事を読みしそうな顔。

さて、記事からは、実行委員の方の「子どもたちにとってわらじまつり」は古里の象徴で、郷土愛を深めるきっかけになる」という言葉が特に印象的だ。祭りをはじめとした地域の行事は、ほくにとつてどういう意味を持つかと考えるきっかけとなった。それらは、「また明日から頑張ろう」という二気源であり、「さらに地域が活性化して欲しい」、「ここに生まれたい」と、未来を見つめ、地域の良さに気付くことにつながっている。その土地の歴史や今まで知らなかった一面を知ることがあります。